

ヨーロッパ諸国の新聞天気図

吉野正敏*

テレビが普及した今日でも、新聞の天気欄にのっている天気図には、それなりの価値があるものと思う。「新聞天気図はいかにあるべきか」とひらき直れば、かなりむずかしい問題となる。これに対する答えは、気象学と毎日の人間生活とが最も密接にふれあうたいせつなキポイントだから、ゆっくりと当事者の方々に考えていただくことにしたい。ここでは、ヨーロッパの新聞天気図のいくつかを参考までに紹介し、日本で話題の一つに提供したいと思う。

新聞天気図を集めるといっても、個人の力では組織的に集めることはひじょうにむずかしい。新聞の撰択にもかなりの問題がある。特に、日本におけるようないわゆる中央紙がない国では、まったく主観的に、あるいはどう然にそれを撰択する場合もある。また、ドイツのように、例え2～3種の中央紙がある国でも、ほとんどの家庭ではそれを読まず、地方紙をそれぞれとるのが現状である場合は、中央紙ばかりを調べても意味がうすくなる。

また、何日付の新聞には何日何時の天気図がのっているかなどを検討するためには、全部の新聞が同日付で、かつ例えば第1版でなくては意味がない。ところが、これも実際にはほとんど不可能で、この条件は今回は無視せざるをえなかった。

ほとんどの新聞は、1962年1月15日～16日、7月16日～17日の日付で、これで冬と夏の状態をみた。その他、できるかぎり春と秋の4月と10月の中ごろの日についても集めた。また、一方では、日付にこだわらず、新聞の種類をふやす努力もした。これは、国別に全般的な傾向を知るためである。現在までに集めたのは国の数で10カ国、新聞の数で37である。ただし、ここでは、朝刊紙にだけ限った。

1. 新聞天気図の特徴

まず、ヨーロッパ諸国の新聞の天気図の特徴を述べた。表は、集めたもののうちから、それぞれ特徴あるも

の(代表的というわけではない)を選び、掲載された天気図あるいは予報図の内容、紙面における図の大きさ、図にでている地域の範囲、それに付いている記事、観測値の表の内容について、まとめて示したものである。掲載されているページは、最初(第1～2ページ)か、中間か、最後(最終ページかその1ページ前)かに分類できる。このうち、最後にある新聞がもっとも多い。選んでいる例は、デイリーテレグラフで、第1頁に、「今日の天気」と題して詳しい予報があり、中間のページに、「前日12時の気圧配置」を示めず大西洋地域の大きな図があり、そのさらに数ページ後にイギリスだけの予想図をのせている。ロンドンタイムスも2カ所にわかれており、中間ページに大西洋地域の大きな予報図、その少し後のページに天気予報やイギリス付近の予報図をのせている。

最も興味があり、最も重要と思われる問題は、新聞には実況図(過去の天気図)をのせるべきか予想図あるいは予報天気図をのせるべきかであろう。集めた新聞のうち、図ののっていないものは別として、過去の天気図を掲載しているもの14で、予報図(等圧線のはいたもの)だけをのせているもの4、実況図と予報図の両方をのせているもの3(イギリスのデイリーテレグラフとデーリーメール、ドイツのターゲスシュピーゲル)、大きな広い範囲の予報図と、小さい狭い範囲の予報図の両方をのせているもの2(イギリスのガーディアンとロンドンタイムス)であった。その他は、地域別の予報を絵図化したものか、或いは全然、図をのせていない。イギリスのデーリーテレグラフ、ガーディアン、ロンドンタイムスなどはいずれも2種のせている。図の大きさも十分で、私の集めた限りでは新聞天気図の第1級といえると思う。

図の大きさは、縦に長いか正方形に近いものが多い。(図の形は、南北か東西のいずれを重視するかに関係している)ただし、上記イギリスの3紙の大きい方の図は横に長い。ちなみに、日本の新聞天気図の大きさは、約横5cm×縦4cmで、面積で比較すると、今回集めたヨーロッパの新聞のどれよりも小さい。

図の範囲はそれぞれ違いがある。自分の国を中心にしていないことはいうまでもない。しかし、同じ新聞で、夏

* Masatoshi Yoshino 東京教育大学地理学教室
(現在ドイツ留学中)

各新聞天気図の特徴と天気欄の記事

新聞名	発行地	天気図または予報図	新聞紙上での大きさ タテ×ヨコ	図の示す範囲* ヨコ タテ	記事の内容	観測値の表
ディ ヴェルト Die Welt	エッセン	前日午後5時の天気図	4.7×6.6	30°W-20°E, 70°N-35°N	気象概況, 当日の予報, 翌日の予報	ドイツ内の前日の気温と雨, 放射能, 河川の水位, 積雪
フランクフルター アルゲマイネ Frankfurter Aelgemeine	フランクフルト	当日7時の予報天気図	5.6×8.4	25°W-30°E, 75°N-38°N	気象概況, 当日の予報と翌日の予報	なし
デア ターゲス シュピゲル Der Tagesspiegel	ベルリン	前日7時の天気図 当日7時の予報天気図	4.4×5.6 4.4×5.6	30°W-20°E, 75°N-36°N 30°W-20°E, 75°N-36°N	気象概況, 翌日朝までの予報, その後の予報	前日14時のベルリンにおける各要素
ル モンド Le Monde	パリ	前日午後6時の天気図	4.6×4.7	30°W-30°E, 70°N-30°N	気象概況, 前日の0時から当日18時までのフランス内の気象変化	フランス内の気温
ザ ガーディアン The Gtardian	マンチェスター	当日(時刻不明)の予報天気図 当日(時刻不明)予報天気図	11.0×8.5 5.2×5.8	55°W-5°E, 67°N-35°N 15°W-5°E, 62°N-48°N	気象概況, 当日の予報, イギリス各地域と付近の海域について	イギリス内各地の日照・降水量・最高気温・天気別にヨーロッパ, 北アメリカ, 北アメリカの天気と気温
ザ デイリー テレグラフ The Daily Telegraph	ロンドン	前日12時の天気図 当日12時の予報天気図	9.7×7.7 4.7×6.0	55°W-5°E, 68°N-33°N 11°W-6°E, 60°N-47°N	気象概況, イギリス内各地と付近の海域の当日の予報	北アフリカ, ヨーロッパ, 北アメリカとその付近の天気と気温
デ テレグラーフ De Telegraaf	アムステルダム	前日13時の天気図	9.8×9.9	30°W-35°E, 70°N-35°N	気象概況, 当日の予報	オランダとヨーロッパ内の気温と降水量
スヴェンスカ ダークブラデット Svenska Dagbladet	ストックホルム	前日16時の天気図	6.0×6.3	30°W-30°E, 75°N-43°N	気象概況, 当日の予報とその後の予報	スカンジナビアと欧米主要都市の気温, 降水その他は簡単
ニューヨークタイムス 国際版 New York Times (International Ed)	パリ	前日18時の天気図	8.4×8.8	10°W-20°E, 60°N-35°N	気象概況, パリ, ロンドン, ベルリンの予報	全世界各地の気温と天気

(* 図の各辺の中央付近の値を示す)

と冬, 図の範囲をかえているものはなかった。

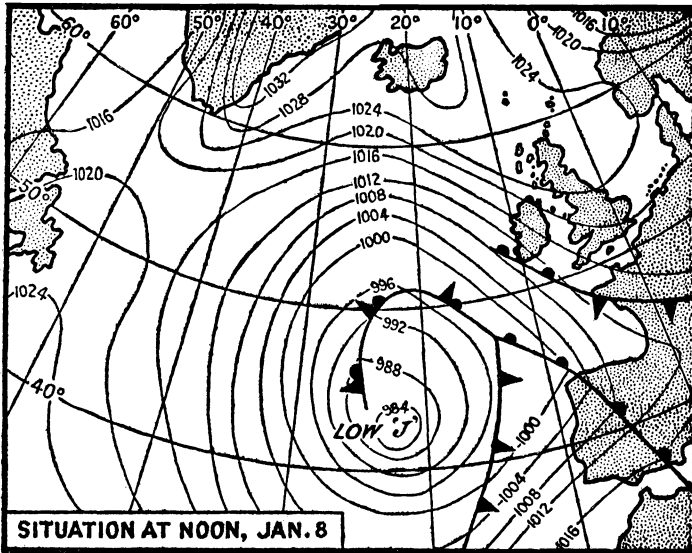
記事つまり予報文についても, 大きな違いがある。気象概況を述べて当日の予報を述べるのは各紙共通であるが, その詳しさ, および, その後の予報(傾向)を述べるか否かの差がある。また, その詳しさにも, 時間的および地域的問題があり, どの程度詳しいかはそれぞれ各紙の特徴のでる部分である。観測値の表についても, 各紙それぞれで, 地方紙は, その地方の値を掲載するのは当然であろう。イギリスのガーディアンは, イギリス・アイルランド・スコットランド約30地点について気温・天気ばかりでなく, 日照時間・降水量までのせ, 欧米・北アフリカの諸都市の気温と天気も詳しい。パリからでているニューヨークタイムス国際版には全世界の主要都市の気温と天気がのっており, 東京の値もでている。

2. 国別にみた特色

イギリス

すでにいくつかその例を述べたように, イギリスの新聞の天気図と記事欄が多くのでる点で, 最も学ぶべきところが多い。実況図と予想図の2枚, あるいは, 広い範囲の予想図と狭い範囲の予想図との2枚をのせている新聞は, 私の集めた内では, イギリス以外では, ドイツに1例あるだけである。ロンドンタイムスとデイリーテレグラフは, すでに述べたように2枚の図や記事が2~3カ所にわかれているが, ガーディアンは全部が1カ所にまとまっており, 横 17cm, 縦は 20cm 以上にも及ぶ紙面を毎日占めている。これだけ気象の報道を重視するのは, われわれにとっては嬉しいことである。本格的な天

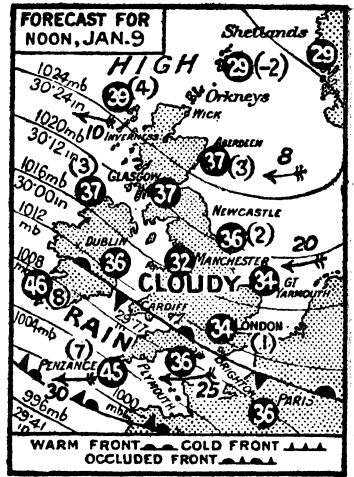
ATLANTIC WEATHER MAP



The letters on the chart identify the high and low systems so that their movements can be followed from day to day while they exist.

(a) 1月8日12時の気圧配置の実況 (7.7cm×9.7cm)

Weather Map

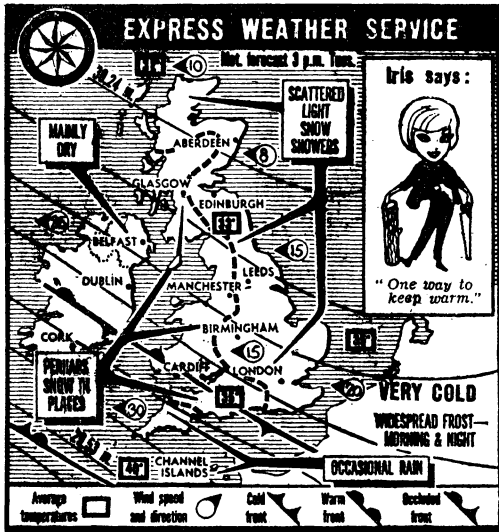


Issued at 6.30 p.m.
Black circles show in Fahrenheit temperatures expected. The equivalent temperature in Centigrade is given alongside in brackets. Arrows indicate wind direction and speed in m.p.h. Pressure in millibars and inches.

(b) 1月9日12時の予報天気図

第1図 デイリー・テレグラフ (1963年1月9日版) の天気図

(6.0cm×4.7cm)



第2図 デイリー・エクスプレス (1963年1月9日版) の予報天気図 (7.8cm×8.9cm)

気図の参考として第1図 (a) (b) にデイリー・テレグラフの図をしめす。

また、このような大新聞でなくても、各紙ともそれぞれ天気図には気を配っている。デイリー・エクスプレスに

は、第2図にしめすような予報天気によってイギリスの地域区分をして、わかりやすくそれをしめしている。くだけた天気図の例としてかかしておく。

ドイツ

ドイツは予報天気図をのせている新聞が多い。全国紙といわれるフランクフルター・アルゲマイネ、南ドイツ新聞がそうであり、地方紙でもフランクフルトのノイエ・ブレッセなども予報天気図をのせている。このような傾向は他の国にはないことである。全国紙では、ディーヴェルトが実況図をのせている。

記事には、河川の水位や、放射能の値をのせている新聞が多いのが目につく。また、予報文では、当日の予報と翌日の予想をはっきりわけて書いている。

地方紙の中でも、ベルリンのターゲスシュピーゲルは、すでに書いた通り前日7時 (6h G.S.T.) の天気図と、当日7時の予報天気図との2枚をのせている。製図もみごとである。これらはベルリン大学気象学教室の提供である。

フランス

ルモンドが小さい天気図をのせている他、割合に天気図をのせている新聞が少ない。

パリーからでているニューヨークタイムス国際版の天気図は比較的大きく、製版もよいし天気の実現もよい。

図の陸地上に国境がはいっているのもめずらしい。

オランダ

ロッテルダムからでているニーエ・ロッテルダムセ・コーラントという新聞には、本格的な天気図がのっている。観測値の表にも、天気・風向風速・最低気温・降水量がヨーロッパ各地についてのせてある。デ・テレグラフには、大きな天気図があり、天気の実現も一般人向きに独特の絵図化のくふうがしてある。

その他の国

気象学の発達程度からいうと、オーストリアやスイスの新聞にはりっぱな天気図がのってそうであるが、中央紙がないせいか、さっぱりよいものがない。あるいはドイツの中央紙がこれらの国の中央紙をかねているのかも知れない。

イタリーのイル・ジョルノは、私がみたうちでは唯一の天気地図がのっている新聞である。しかし、天気でイタリアを3階級に地域区分してあるに過ぎない。

3. 予報文と天気の局地性

私が新聞の天気欄をいろいろな国について集めている大きな目的は、実は、「天気予報がどの程度の地域単位ごとにでているか」を知りたいためである。日本では、地方版の新聞には、一県を3地域あるいは4地域にもわけて、天気予報がでていることもめずらしくない。これは非常にこまかな局地天気予報である。もちろんこういう予報が可能なのは、気象台・測候所などの密度や気象事業の内容に左右されることであるが、他の諸国ではどうなっているかが知りたい。また、気象台・測候所などが予報をやって、新聞という窓口を通じて、どのよう

に、広く公表され、地域ごとの人間生活にいかされていくのかも、興味がある。

さて、こういう目的で予報文を読んでみると、ヨーロッパ諸国の新聞に書いてある予報文はいかにも大ざっぱである。ほとんどの新聞が地域を指定していない。地方紙ならば、当然その地方のものであろうが、いわゆる中央紙でもひとつの国を細分しているのは非常に少ない。面積だけで比較すると、オランダが近畿地方くらい、スイスが九州くらい、オーストリアが近畿・中国・四国をあわせてくらいである。日本では例えば長崎県の中だけでも3地域にわかれていることを考えるとずいぶんな違いである。

この点からも、先にあげたイギリスの3新聞、ディリー・テレグラフ、タイムス、ガーディアンはこまかい。日によって、つまりその日の天気によって違うらしいが、イギリス（アイルランドとスコットランドを含めて）を6ないし10地域にわけ、別に付近の海域を1～2地域にわけて予報文がかいてある。しかし、面積からいうと、それらはわが国の近畿地方・中国地方……といった地方毎くらいの広さで、わが国のそれに比較すれば、問題にならないあらさである。

ドイツでは南ドイツ新聞が、南バイエルン・アルプス地方・北バイエルン地方・ラインマイン地方・海岸地域と5地方にわけて書いており、ビルトという写真新聞がやはり西ドイツの地方の予報を書いている。しかし、これもやはり、わが国の地方ごとくらいの広さである。

このような事実には、わが国とヨーロッパ諸国の地形や、天気変化の差ばかりでなく、気象事業や、新聞社の機能などいろいろの関係があって、ここで性急な結論はさけたいと思う。しかし、今後も、よく検討されるべき問題であることは確かである。

関西支部だより

10月の四国地区の月例会は26日に高松地方気象台において「瀬戸内海の霧」について行なった。

題目：瀬戸内海の霧

- 1) 瀬戸内海全般及び播磨灘の霧について
神戸海洋気象台 平沢 健造
- 2) 備讃瀬戸の霧について
高松地方気象台 菊田 一郎
- 3) 愛媛県の霧について
松山地方気象台 太田 盛三
大成 公道

以上の瀬戸内海の霧について、霧発生の予報法の現状と、発生機構上の問題点について討議した。

訂正

Vol, 9 No 12. 「東京における降水日数から見た太陰暦上の特異日と季節の分類について」

p. 422

第2表 季界日一覧表中

季節番号の1行目14を15に訂正、

15行目の次に15を加える、

日付の14行目の次に1月4～5日を加える、

たての線に、番号14と15のあいだによこ線のしるしをつける。

p. 422. 右欄下10行目14を15に訂正。